

全
歌
集
篇

凡 例

- 一 本書は、一条兼良の現存する和歌を、管見の及ぶ限り集成し、かつその各句索引を付し、解説・略年譜を加へたものである。
- 二 兼良は生前八家集Ⅴを撰しなかつたと思はれる。従つて、本書では、他者詠と共に伝はる多人數百首歌・歌会詠草等を収集し、諸書に点在する和歌を、その真偽を検討し、以上を可能な限り編年に配列した。
- 三 本文は、作品ごとに編者が善本乃至は代表的な伝本と認定した一本を底本とし、他に重要と考へられる若干の伝本によつて、適宜校異を示した。なほ、底本・校合本は、各項の冒頭に一括して掲げた。伝本の書誌・系統等は解説を参照されたい。また、歌会・歌合等の呼称は、私にこれを定めた。
- 四 各底本は、次の規準に従ひ翻刻した。
- 1 本文は、底本の書写形式を残すことを主眼とし、漢字・仮名遣・疊字等は、すべて底本のままとしたが、漢字の字体は通行の字体に、変体仮名は、通行の平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣を（一）に入れて、右傍に注記した。
- 2 底本の書写形態にかかはらず、和歌はすべて、上句と下句との間に一字分の空白を設けて、原則として一行組みとした。
- 3 便宜上、和歌に通し番号を附した。
- 4 虫損等による欠損で、判読不能の箇所は、その字数分を□で示した。また、有効な残画があり、推定可能な箇所は、囿の如く示した。
- 5 判読が困難で、疑問の残る箇所は、とりあへず私案を翻刻し、右傍に（？）を附した。
- 五 底本と校合本との校異は、漢字と仮名、疊字等の相違はとりあげず、仮名遣・字体・表記等の相違等も、原則として省略した。

1 永享五年（一四三三）三月二十七日足利義教邸歌会

〔底本〕静嘉堂文庫蔵『瑠璃壺百首』△82・43▽所収本

春日詠花万春友 和歌

従一位兼良

1 桜花あかぬにほひに万代を いはふ心の色やみゆらん^{（む）}

2 永享百首△永享五年▽

〔底本〕百首部類所収本

〔校合本〕内閣文庫蔵「後花園院御百首」本△201・317▽

（内）

宮内庁書陵部蔵「詠百首和歌」本△伏・45▽

（書）

神宮文庫蔵「後花園院御百首」本△3・696▽

（神）

続群書類従「後花園院御百首」本

（群）

詠百首和歌

春二十首

立春

△注▽
従一位兼良

△注▽以下は省略した。

2 春はきぬ霞の衣しろたへの 雪にかけほすあまのかく山

霞

○打きらしうちきえし(書神群)
 ○えーか(枝敷)と傍記あり
 (書内神) ○おりーおも(書神)
 ○物ーも(群)

6b 群(解説参照)
 ○出てーいてし(書門神)

3 春の色の今一しはやこれならん^(む) みとりにかすむいその松原

鶯

4 打きらし雪ふる里の梅かえに おりしる物とうくひすぞ鳴^(を)

残雪

5 よし野山つれなくきえぬ白雪や また初春のあり明の月

野若菜

6a 衣手にかつふる雪をはらふとて 野への若菜はつむひまそなき

6b はる毎に君かためにと野へに出て わかなとともに年をつむ哉

里梅

7 朝日影にはへる山の春風に ふもとのさとは梅かゝそする

簪梅

8 とをつ人軒端の梅の花の香に さそはれぬ春は松風そふく^(は)

春月

9 春の日のかけみし空もとをからて^(は) 光のとけきタつくよ哉

春曙

10a 心なき難波のあまも忘れては なかめやすらんはるのあけほの^(む)

10b 山の端にややわかれ行く横雲の 跡よりかすむ春のあけほの

10b 群

帰雁

11 うらみ侘たのむの雁もいまはとて かへす玉つさかけて行覧

春雨

12 そめ残すしるしもみえす春雨の ふるのにたてる杉のみとりは

柳

13 青柳のうちたれ髪やうつるらん^(む) 池の玉もにはる風そふく

待花

14 咲やらぬ花をまつちの山のはに 人たのめなる春のしら雲

初花

15 色ふかくいつ馴ぬらん山桜 初花そめのころもへすして

見花

16 いやしきもよきもさかりの桜花 おなし心にあかすとや見る

盛花

17 有明の空にかさなる雲見れは 月のさかりそ花にうつれる

落花

18 あたにちる花をもちつはうらみなて^(つて) なと風のみうきになすらん^(む)

款冬

〇まする—ますか(内)

19 みなそこに岸の山吹かけ見えて ふかくなりゆく春の色かな

藤

20 松の葉に色こきまする藤の花 春の錦のゆかりとや見ん^(む)

暮春

21a いかにしてもろこし舟も行春を 袖のみなとしはしとゝめん^(む)

21b はなちりし後はかひなき日数さへ せめてとしたふ春の別路

21c 聞もうし春の別のおしき日^(む)に 花さへさそふ入相のかね

夏十五首

更衣

22 花の色をかふる袂はにほはぬを けさはかとり^(む)のなにやたつらん^(む)

卯花

23 卯花の垣ねやいつこ榊葉に しらゆふかけて神まつところ

待郭公

24 つれもなき心は見えつ時鳥 何たのむらん^(む)くるゝ夜ことに

聞郭公

25 たかためにまたれてきなく初音とも ぬしきたまらぬ郭公かな

早笛

26 あま人のしほたれ衣ほしあへす みなとの小田に早笛とる也

橘

27 いつとなく忍ふむかしを橘の さつきのみとはなににほふらん^⑤

五月雨

〇けるーけり(神)

28 五月雨はこけのした行山水の 岩こすまてになりける哉

夏草

〇さゆりはーさゆかは(神)

29 まとふりてふみ見ぬ庭のさゆりはに なをくさかくれ残る灯^(ほ)

夏月

30 夏の夜はいかなるときそ有明の ころをもまたてのこる月影

鵜川

31 鵜飼舟月もをくらの山かけに やみをしたひてかゝりさす也

螢

〇岩瀬ーいはふち(内書神群)

32 わきかへる思ひをしれと山川の 滝津岩瀬にとふほたるかな

夕立

33 夏の日の入のゝすゝきうちなひき 二村すきぬ夕たちの雲

蟬

34 風吹はいそへの波もうつ蟬の ねにあらはるゝ松のかけ哉

納涼

35 b
群

35a 川風になひくやなきのいなむしろ しく物なしとすゝむ暮哉

35b おもふとち木の下かけにまるとりして 千年をまつ風を涼しき

夏祓

〇夏―かせ(群)

36 さらにぬたにたつことやすき秋風に けふのみ夏の御祓せし哉

秋二十首

初秋

37 敷妙の枕のみこそ白露の 袖にもかよふあきのはつ風

七夕

38 待わたる雲井はるかに思ふ哉 あふはほとなきかさゝきのはし

萩

〇かは―かと(内)

39 萩の葉をなにと風のしほらん^(む) 秋の草木はこれはかりかは

萩

〇をとをはけし^(む)み―をことはかし^(む)
み(書)40 秋風のをとをはけしみたかまとの 尾上の真萩ちりや過なん^(む)

虫

41 鳴虫のなみたはしらす秋の野の 草のたもとに露そこほるゝ

雁

42 白露の木の葉色とる夕暮に 秋風さむみ雁そなくなる

鹿

43 ま萩ちるをのゝ露霜さむからし 妻とふしかのさ夜更でなく

秋夕

44 津の国のいくたひそてに露かをく^(お) しつくもゝりの秋の夕暮

秋田

45 秋の田のかりほのま萩ちらまくも^(お) をしねいろつく露のさむけさ

山月

46 かひかねの雲を嵐のはらふより 月もさやけきさよの中山

野月

47 露むすふたまくら^(お)の野ゝ夜半の月 床は草葉と影そやとれる

関月

〇夕つけ鳥も―ゆふつけとりは
(内書神群)

48 関の戸も明かたちなくなりぬとや 夕つけ鳥も月に鳴らむ

橋月

49 橋柱むかしなからの秋の月 いく代をかけてすみわたるらむ

浦月

50a しほかまの浦の煙は風に消て 月のくまなるうきしまのまつ

50b 月影の雪もつもりの浦風に 猶秋寒し住吉のまつ

菊

○秋風の―あきかせに(内書神群)

51 秋風の吹あけの菊の匂はすは 花をも波とみてやすきまし
擣衣

52 うちすさふしつか衣のおさをあらみ まとをにつちの音そ聞ゆる
霧

○まかき―ふかき(書袖)

53 秋風になひく庵のくれ竹や 霧のまかきのたえま成らん
杜紅葉

54 舟よする渚のもりの紅葉はゝ 色そふまゝになをそこかるゝ
河紅葉

○もるゝ―もれぬ(書)

55 となせ川紅葉はかりはしくれぬを にしきにもるゝ滝のしらいと
暮秋

56 神かきにぬさとちりかふ紅葉哉 しめをもこえて秋や行らん
冬十五首

時雨

57 我みはや三十あまりのかみな月 なをや時雨のふりまさるへき
落葉

〇露ししも(群)

58 はゝそ原ちるとやいはむ時雨とや いはたのをのゝ木からしの風

霜

59 霜さゆるまのゝかや原うつもれて 秋見し露の面影もなし

寒草

60 秋まてはみさりし花や桜あさの かれても残る霜のした草

冬月

〇たえまーたみま(書神)

61 村雲のたえまの空に影見えて 時雨をいつる夜半の月哉

氷

62 よとゝもにさえし嵐の山川に うかふみなはそ氷はてぬる

霰

〇をたえせてーをたえして(内書
神群)

63 こほりるし滝の白玉をたえせて 山の岩ねにふる霰かな

千鳥

64 月影はおきに出にけり友千鳥 磯の浪分よとなくらん

水鳥

65 はらひえぬ夜のまの霜はあしへ行 かもの羽かひも色かはる迄

浅雪

〇こすけーこすゑ(群)

66 今朝のまにふる白雪はあさはのゝ こすけも草もそれとみえつゝ

深雪

67 山風もはらふ程こそはらひけめ 尾のへの松の雪のした折

神楽

68a たきすさむ庭火のまへにをく霜は 星の光そさえまさりける

68b 星うたふ庭火のまへの霜よりも 神の心のとけやしぬらん

鷹狩

69 ぬれにけりやとくはならぬやかたをの 鷹もましるにあられふる也

炭竈

70 人しれすさむさをこふる炭竈の 煙もなをやしたこかるらん

歳暮

71 筏しのさすともいはす柚川に なかれてはやきとしの暮哉

恋二十首

寄月恋

72 この夕ほのみか月のよひくに 影そふことくこひやまさらん

寄雲恋

73 はれすのみ思ふ心や君かあたり いこまの山の雲となるらん

寄風恋

68b
内

○ましる―ふしろ(神) ○ふる也
―ふりつつ(内書神群)

○まさらん―わたらん(内書神群)

○なるらん―なりけん(内書群)
なるけん(神)

○なに―なほ(内書神群)

74 かくはかりうはの空なる秋風を 我身にしめてなに思ひけん^(む)

寄雨恋

75 ぬれつゝも我やゆかん^(む)のよひの雨に やすらふ程をとふ人もかな

寄露恋

○夕暮^{はイ}の―ゆふくれは(内書神群)

76 袖の露をこはきかうへと思ひせは たゝ夕暮^{はイ}の風やまたまし

寄山恋

77 夢にさへあふともみえすうつ山 うつゝにまさる人のつらさは

寄原恋

○すらし―すすし(群)

78 わきもこかきぬにはすらしま萩原 うつろふ色にならひもそする

寄海恋

79 しらせはやうさもつらさもありそ海の 浜の真砂のかすをつくして

寄橋恋

80 おく山の谷のしはゝしまれにたに あふ人なしにこひや渡らん^(む)

寄関恋

81 関守のうちねのよはゝあつまちの なこそとゆふそとふにまされる

寄木恋

○うちね―うきね(内書神群) ○
なこそ―なからそ(神)

82 あふ坂はなのみなりけりひとこゝろ つれなき色に杉たてる山

寄草恋

83 道のへの尾花かもとの名もつらし わか恋草のしけき心に

寄虫恋

84 されはとてけたぬ思ひにをの(お)か身を 徒になす夜半のなつ虫

寄鳥恋

85 明ぬるか君かこぬ夜の数をへて 門田のしきの百羽かく也

寄獸恋

〇とふーこふ(群)
86 夜もすから妻とふしかよ我こひに たれかまさるとなく音くらへん(む)

寄玉恋

87 涙こそまつせきあへねうき数を とへとしら玉いはぬたもとに

寄鏡恋

〇みせすーみえす(書)みえす(ぎ)(群)
88 草ふかき野守の鏡かりにこし かけたにみせすとをさかりつゝ(ほ)

寄枕恋

89 あかさりし人の契りのあさねかみ 我手枕にまたもみたれす

寄衣恋

90 しかのあまのしほやき衣かけてなを(ほ) 思ふもかなしうらみはてなて

寄糸恋

鳥のねに―鳥音(書神)

91 うきふしはなを^(ほ)しけ糸のとしをへて たへぬ思ひにむすほ^(む)れつゝ
雑十首

暁鷄

92 誰しかもあふさか山の鳥のねに 旅ねあけぬとおきわかるらん^(ん)
松

93 みちのくのあこやの松もひとならは 忍ふ昔のことやとはまし
竹

94 紅葉にも花にもあらぬ竹のよの 色にはかはるおりふしもなし^(を)
山家

95 我庵はたえす嵐のならしはに なれはまさらてすみうかれつゝ
田家

96 小山田のひたのかけ縄引結び かり庵つくるときそきにける
旅

97 ふるさとのとをくなり行むまや路に 重ても聞すゝのこゑ哉^{音イ}
浦鶴

98 わかの浦や芦辺のたつの代々をへて 更に雲井に遊ふけふ哉
述懷

〇とき―あき^{とキイ}(群)

〇こゑ―おと(内書神群)
^{音イ}

99 人なみに世をや渡らんさほ川の すみにこるをも分ぬみにして

神祇

100a 我たのむ三の社もてらしみよ 御代を祈るに二心なし

100b
内

100b なみならぬめくみそふかき石清水 むすふちきりや代々をかけん

祝

○あし原のーあしはらや(内書神)

101 君か代は浪しつかなるあし原の やまと島ねそけにうこきなき

3 永享六年(一四三四)十月一日宋雅七回忌品経歌

【底本】宮内庁書陵部蔵『品経和歌』ハ501・816V所収本

詠方便品其知恵門雖解難入和歌

従一位兼良

102 いりかたきむくらの門もすむ月の 光のみこそさはらさりけれ

くく(懐旧)

103 へたてこし月日なからにうき雲の 又めくりあふ空そしくるゝ

4 永享六年十二月二十一日新玉津島杜法楽歌

【出典】新統古今集・夏・三〇五

【底本】宮内庁書陵部蔵吉田兼右筆二十一代集本ハ510・13V

104 左大臣よませ侍し新玉津島社三十首歌に江螢 前撰政左大臣
螢とふほり江の波のよることし しくてふ玉の数やそふらん^(註)

5 室町亭行幸和歌[△]永享九年（一四三七）十月二十二日[▽]

〔底本〕高松宮藏有栖川宮旧藏『行幸和歌御会』

端作同（冬日侍 行幸室町第同詠鶴有遐齡和歌）

従一位藤原兼良

105 ちきりをくよはひやさらに久かたの くもるのけふのやとのともつる^(註)

△参考[▽]

冬日侍 行幸室町第同賦

池上宴群臣一首^{以歌為詞}

従一位藤原兼良

竜袞宴時池上寛 横流鳳舸載衣冠

吾儕湖海昇平日 同沐恩波承此歆

△注[▽]次歌・序のみ、以下の伝本と校合した。

〔校合本〕群書類従所収「室町殿行幸記」本

尊経閣文庫藏「室町殿行幸記」△7・13[▽]本

（群）
（尊）

同「仙洞三席御会詩歌并序 附永享九年室町亭行幸三船和歌一首并序」
 △13・2√本 (仙)

○冬日—冬(仙)

冬日侍 行幸室町第同詠松色映

池和歌一首并序

從一位藤原兼良

○支流—又流(仙)

東京城外勝境左相府中名園水引鴨川之支流

○以—以群尊仙) ○比—此(群)

山移鼈背之品字戲乎大液何以過比積翠未足比焉

○閑—閑仙)

吾后乘万機之余閑動 六竜之遊幸漢文駐蹕

○細—佃(仙) ○定策之—定策々
 (仙) ○更—×(仙)

之地再回細柳宮之春宋祖定策之時更下韓王

堂之雪不替繼累聖之遺美亦得觀永德之旧

儀教張釣天平階前治世之音盈耳方賦湛露

乎池上嘉賞之燕楽情觀夫長松蔭波為侶者

丹頂緑毛之巡寿麗藻照水可師者索鵝斑鳩之

古風小臣捧載 皇恩陪廁御宴雖謝逸興於

柿下之什聊伸雅懷於楮尾之余其詞曰

106 池水のなみもいろそふ松かけに なひく玉もは千世のかすかも

○緑—保(仙) ○巡—遐(群) ○
 索—素群尊仙) ○鵝—我(群)

○柿—仰(仙) ○伸—仲(仙)

○かも—も(尊)

6 永享十年（二四三八）二月二十八日宮中歌会始

〔底本〕宮内庁書陵部藏『禁裏御会和歌永享十年』△501・290V

春日詠松有春色和歌

従一位兼良

107 みとりそふまつにちきりてわか君の ときはのかけもいくはるかへむ

7 『新統古今集』△永享十一年（一四三九）V所収歌

〔出典〕新統古今集・恋一・一〇一五

〔底本〕宮内庁書陵部藏吉田兼右筆二十一代集本

題しらす

前摂政左大臣

108 なひかすはいかにせんとかすまのあまの たくもの煙思ひたつらむ
(む)

8 前摂政家歌合△嘉吉三年（一四四三）二月十日V出詠歌

〔底本〕続群書類従（巻第四百十）所収本

〔校合本〕河野信一記念文化館蔵本△356・967V

同『歌合集』所収本△123・956V

(河)
(集)

一番 初春

女房

109 春風に消る氷のとゝめあへす むへも年とは岩そゝくなり

左

右

権大納言資広卿

春きぬとたれ岩代の雪に猶 むすほゝれ行松の下草

〇 たつさはらさはら—たゝさはら
さはらは(河)

〇 永承々曆—永承曆(集) 〇 等—
ら(河集)

〇 いくはく—いくそはく(集)

〇 中—うち(集) 〇 花は—はな
(河)

やまと歌は天地ひらけし神代より。わか国のならひ。人のしはさ^(お)と
成にければ。是を好もてあそへは。名をくちせぬ世に残し。これを
まなひたつさはらさはら。なさけしらぬ人といはる。かゝりければ
ならの葉の名におふ都には。万葉集をえらはれて勅撰とはしめをか^(お)
れ。芦原の代々の御門はもゝのすへらきにあまり給ぬれとも。此道
今にたえさるへし。しかのみならず。亭子の聖代にはひたり右のつ
かひをむすはれ。村上の御時にはかちまけのこと葉をしるさる。そ
れより此かた永承々曆等の内裏歌合。ならひにわたくしの家くゝに
いたるまで。時にのそみ事にふれて。つとめきたれる跡。しらすい
くはくそや。或時はあさかの沼のあやめ。なかくみしかきねをひき
かけ。或時は吹上の浜のきく。ふかきあさき露をかことゝせり。閨
の中の夏の扇はおりく^(お)の風をあらそひ。前栽の秋の花はさまく

○唐のうた―あるひはからのうた
(河集)

○ありけり―ありける(集)

○なにかは―なにゝかは(河集)

○たえにたる―たえわたる(集)

○侍れと―はんへれと(集)
○かゝること―かゝることを(河集)

○くせよ(集)

○をよほさゝれは―をよほされは(集)

○たとひたれは―たとひされは(河)
○たかひされは(集)

○たつさはる―たゝさはる(河)

の色をつくす。抑六くさのすかたにかなふをとり。八のやまひをさるをよしとする事は。そのおもむき同じければとて。唐のうたにもあはせたる成へし。こゝに春日山の麓のちりをつきては数世にをよひ。わか(え)の浦の人なみにたちましりては。四そちの齡にすぎぬるまで。春の花のさかへ(え)をわすれ。秋の草とおとろへたる。あやしのひとりのおきなありけり。もとよりほたるの窓にむつひす。雪のつくえにうとければ。なにかは心の泉みなもと浅からず。こと葉の花匂ひふかゝらむ。いはんや歌合は浦のはまゆふかさなれるあとありといへとも。あまのあしかきまちかき世にはたえにたるを。まめやかに思ひくはたて侍る事は。春のあら田かへすゝかたはらいたく侍れと。かゝることおもひとゝむるくせなんあやにくにて。後のあさけりをかへりみさるなるへし。事ひろきにをよほさゝれは。わつかに三十人をえたり。歌はかすをたとひたれは。をのゝ二十首をよめり。この道にすゝめ入れんことをこひねかへは。きのふけふはしめてまなふともからをものそかす。かのふみにもたつさはる事をしらしめむとなれば。ものゝふのたけき家とてもこれをきらはす。なには堀江のよしあしをわかち。しかまの市のかちまけをさたむる

○ ことをもーことを(集)

○ かれこれのーかれこれ(集)

○ われらーわれ(河)

○ といひあしーナシ(集)

○ いさゝかーいさゝかはいさゝか
へ(河)

○ 難せらるー難をしらる(集)

事は。いにしへの先達もかたきわさにいふめるを。このたひかくお
こし給へ侍れは。この道かへりてあさくおほえ侍れと。たゞ昔のか
ゝみ。ちりの世の末に佛をたにのこさむの心さしなれは。こゝにい
たりて又さしをくへきにあらず。おほよそひとりの判をもちゐすし
て。衆の議をとふらふ事は。われしらぬことをも人しる。人のいは
さる事も我いふ。かれこれのこと葉をかよはして。ほめそしる道を
つくさんとなり。われらかことくは。詞につけ心につけ。いまたそ
のさかひにいらされは。たとひよしといひあしといはんも。なんそ
まことをとらむや。あたのいつはり悦ふ事なかれ。きすなきそしり
いたむ事なかれ。いかにいはんや。その座にあたりては。いそのか
みふるのくさくひきみるにをよはねは。本歌といひ同類といひ。
見し事聞しこと。ゆふへの雲のあとかたなく侍るは。いとくちをし
きわさならし。たまゝもいひかはせる事ともは。みなものおほえ
ぬひかことのみそあるへきを。もしほくさかきあつめん事は。はゝ
かりの関のはゝかりおほく侍れと。たゞにやみなんことのさすかな
れは。いさゝかにさせてふむしのつゝりけるになんありける。
左右の歌。講頌の後。をのく難せらるへきよし申侍しかは。人

○右―ひたり(集) ○きさらきの
―きさらき(河集)

○あた―あえか(河集)

○梅の花の―うめのはなのいろの
(河集)

く一同に申され侍しは。左歌。むへもとしとはいはそくと侍る。本歌のより所たよりありてきこえ侍り。右の歌又すかたあしからず。たゞし岩代のむすひ松。公宴にはあらされと。はしめのつかひには猶こひねかふへくやあらさん^(む)とて。左の勝にきためられ侍り。

二十番 (中春)

左

法印堯孝

青柳もわつかになひく比よりや うす花さくら匂ひそむらん^(む)

右

女房

110

けふまつる三笠の山の梅かゝは 神のおとめと袖やふれけん^(む)

右は源氏物語に女楽の日女三宮の御かたちをたとへ侍るとて。きさらきの十日はかりの青柳の。わつかにしたりはしめたらん^(む)心地して。鶯の羽風にもみたれぬへく。あたにみえ給ふとあり。此事を思ひてよめるにや。いと^(を)おかしくこそ侍れ。右は求子のうたに。梅の花のことみかさの山のおとめ^(を)をはすてゝとうたひ侍れは。その事とは聞え侍れと。青柳の糸のしなひには立ならふへくもあらさるを。なとてか持とつけられ侍らん^(む)。いと^(を)おほつかなくこそ侍れ。このつ

○神威—神威(河) ○とは—と
(河) ○侍りけり—はへりける
(河集)

かひを判せられ侍しは。きさらき十日の事なりけり。時こそありけれ。その日しも春日のおほんまつりにあたりて侍りしかは。神の納受うたかひなきよしを人々申侍りて。かつは永年の例にまかせつゝ。神威をもて持とはしるされ侍りけり。

三十番 (後春)

左

右衛門督

咲藤のわかむらさきのかさしにも かくれぬ老の浪そかひなき

右

女房

○つゝち—つゝら(河集)

○といへる歌の—との(集)

○つゝち—つゝら(河)

○つゝち—つゝら(河集)

○なく—すくなく(集)

111 浅みとり野原のつゝち末つゝらに 春のいやおひと成にける哉

左はおりてかさゝむ老かくるやといへる歌の心をとりて。かくれぬ老の浪そかひなきといへり。右はひき野ゝつゝちすゑつゝらにといへる歌の詞をかりて。春のいやおひと成にける哉とよめり。ともに本歌を忘すといへとも。若紫の藤猶色ふかくして。あさみとりのつゝち。さらにみ所なく侍るに。持にさため侍るはいかなることにかありけむ。

五十番 (初夏)

左

女房

○なよーなき(集)
○万葉の一万葉(集)

112 春過て夏簀の河になくかもの あをはにしける山の陰かな

右 持和朝臣

忍ふなよ卯月のものと時鳥 空にもしめをゆふくれのこゑ
右歌。空にもしめを夕くれの声なと優に聞え侍り。左は万葉の古風
を存せるはかりにて見所なく侍を。勝とさためられ侍るは。ひとへ
にあたのいつはりに侍るへし。

六十番 (中夏)

左 女房

○なしーなく(河集) ○かなーか
は(河集)

113 さ月とて咲や橘まひなしに たゝなるへきほとゝきすかな

右 入道二位

○かくへきーかへへき(集) ○た
めしとやーためしもや(集)

袂にも千代をかくへきためしとや ぬま江の菖蒲けふは曳らん

左歌。あやしの翁か歌に侍りけり。風情のつきぬるにより。みゝ遠
き旋頭歌をさへひきゐて侍れは。勝負などの事は思ひもかけ侍ら
ぬを。右の歌のさたに不及。左右なく勝字を付られ侍りぬる。かへ
すゝも片はらいたくこそ侍れ。

七十七番 (後夏)

左 常秀

○左歌—左の歌(河) ○右歌—右の歌(河)

○ほり—ほか(河集) ○思—思給(河集)

○よし—よしとり。く敷(集)

○すゝみて—すゝめて(河)

○奇語—奇語(集)

○まこひ—まよひ(集)

○一番—百番(河) ○覚へ侍るを—おぼゆるを(集)

○いへる—いへるや(河集)

みそきするかも川浪いつとかは たゝすの杜にかよふあき風

右

女房

114 みな月の照日のあせの流出て かへらぬは身のよはひなりけり

左歌。たゝすの森にかよふ秋風など。優に宜しくきこえ侍り。右歌は例のつたなき詞に侍りけり。あせのなといへるたくひ。古人も詠せざるにはあらざれども。ほりもとめたる躰裁なからあやしく思侍るを。いかなる事にか有けん。^(註)勝へきよし申人々も侍りしを。堯孝法印すゝみて申侍りしは。此たひの歌合は上世のまつりことをしたひ。中興の業をこひねかはれ侍れは。いかにも正しき風をあふき。すたれぬる路をすくはるへきを。かへりて耳なれぬ僻字をもとめ。目をおとろかす奇語をえらはれ侍らはいかゝはせん。^(註)初学いよくこのみちにまよひ。後輩さらにかの非をさることなからむ。其故は六百番歌合に後京極摂政の詠。あら玉のとしを雲井にむかふとてけふ諸人にみき給ふなりと読給へるを。判者五条三品は。あら玉の^(お)なとを^(お)かれたる。一番のつかひとは覚^(え)へ侍るを。下句のみき給ふなりといへる。無下にたゝ詞に侍らむと申き。部のはしめの左の歌にて侍れは。かた／＼勝のよしを申へかめれと。かの三品は此みちの

〇いたはる―いたはり(集)

本意を存せしによりて。ことはの中にも猶詞をいたはる軀を執せられしにや。照日のあせなど。作例あるへき事は申に及す侍れとも。此歌勝侍りなは。道のため心もとなくや侍らん^(㊦)とありしかは。かの直言誠にことばり^(㊦)をせめておほえ侍れは。まけに付られ侍るへきよし申侍りしを。猶折中の儀をもてなためられしにや。持とつけられぬるこそかたはらいたくおほえ侍れ。

九十一番 (初秋)

左

女房

115 山かけや秋とあらしの吹なへに 聞もかなしき日くらしの声

右

常秀

古郷の秋は誰にか忍ふらん^(㊦) またほに出ぬ萩の上かせ

左。日くらし。聞よくも侍らぬうへ。かなしきなといふ詞。いたくさのみ用へきにあらざるをや。右。又穂に出ぬ萩の上風なと優にきこえ侍り。尤勝侍るへきを持と付られ侍るは。こゝろもとなくこそおもひ給れ。

百番 (中秋)

左

女房

116 常盤山色もかはらて光そふ こよひの月に秋は見えつゝゝ

右

中納言

露ふかき浅茅か原によもすから かなる人のころもうつらん^(む)

常盤山の色もかはらぬ風情。めつらしからぬ事なれとも。名月を賞
せるにや。勝とつけられ侍り。

百十五番 (後秋)

左

女房

117 長月は残る霜夜の有明に よはり^(む)はてたるむしの声かな

右

氏数

夕くれの秋こそあらめ雁鳴て さむきあしたもうちしくれつゝゝ

〇し侍るへきしはるへきに(河
集)

〇するましき―さるましき(河集)
〇左歌―左の歌(河集)

右歌。雁鳴てさむき朝は。殊にしくれもこそし侍るへき夕暮の。秋

ならてはするましきやうに聞え侍るは。いかゝとおほえ侍れと。左

歌の下句。俊成卿のさりとともと思ふ心もむしのねもよはり^(む)はてぬる

秋の暮哉と侍るに。おもかけ思ひいてられ侍るよし。その^(お)く申侍

て。右の勝とさためられ侍り。後日勘見侍れは。六百番歌合定家卿

歌に。あり明の名はかり秋の月かけによはり^(む)はてたる虫のこゑ哉と

侍りけり。ことの外の不覺にこそ侍りけれ。

〇後日―後日に(河集)

○ かける―かけ(河)
○ たとへは―たとへ(河)

○ うき―うさ(河集)
○ 歌に―たゝ(河集)

百二十七番 初冬

左

118 から錦けさより冬や立田姫 染あへぬ枝にしくれ降なり

女房

右

寢覚して聞は時雨の音す也 これさへ秋のうきをのこして

小宰相

左歌。宮内卿かちりあへぬ枝にあらしふくなりと侍る歌に同じ心詞
なり。存内の不覺にや。右歌勝へきに。なとてか持とつけられ侍り
つらん。

百四十一番 中冬

左

女房

119 山あひにすれる衣のたけのふし いくよに成ぬかものみつかき

右

持房

ちはやふる神もさこそはみたらしや 河風さゆる山あひの袖
かものりんしのまつりは寛平の比よりはしまれるにや。事の子細
は。貞治の歌合にみえ侍れは。かさねて申におよはす。源氏若菜の
巻すみよしまうての事に。山あひにすれるたけのふしとかける詞の
侍りしやらん。たとへは臨時のまつりの舞人。あをすりの袍は竹を

○事こそ—ことにこそ(河集)

○勝劣—勝負(河集)

○こと—かこと(河集)

文にすれる事こそ。右。山あひの袖も。十人の中をいて侍らし。行粧の勝劣さたかにみえわかれ侍らねとも。たゞ左にたち侍るばかりをことにて。勝になされ侍にこそあらめ。

百五十五番 後冬

左

女房

120 むかしよりすさましき物といひ置し 霜夜の月にとしの暮ぬる

右

経清

明はまた霞こむへき山の端を こよひはとしのへたてけるかな

○枕草—枕草子(河)

○あさ—あさし(集)

○覚—美之集

左歌は清少納言枕草に。すさましき物はしはすの月よと申侍る心にや。たゞし紫式部はすさましきためしにいひ置けん^(む)人のこゝろあさゝよと。朝かほの巻にかきのせ侍るそかし。ひとへに少納言か方人をし侍るこそあやしく覚侍れ。右歌。霞こむへきと侍るも。思ひたきにや侍らむ。いかさま此番持とそ侍りし。

百七十番 (春待恋)

左

女房

○女房—底本なし。(河集)により補ふ。

121 春の日を正木の綱のうちはへて くるしやくれを何たのめけん^(む)

右

近衛

○ものーものと(河集)

○給けむーたまへれ(河集)

○本歌一本(河)

○行―断(河)斯(集) 〇取―座
(河集)

○侍るにより―はへるより(集)
〇けり―ける(河集)

けふいくか詠くらして人までは なみたそ春のものなりぬる

左は後撰に。てる月を正木のつなによりかけてあかすわかるゝ人を
つな^(む)かんと侍るを思ひてよめるにや。右は又在中将の余風をした
ひ。涙そ春のものと成ぬるなど。艶にきこえ侍れは。尤勝侍るへき
を。かの思ひもかけぬ正木のつなにかたひく人やありけむ。勝とつ
けられ侍るこそ。かたはらいたくおもひ給けむ。

百八十九番 (夏逢恋)

左

入道二位

恋くゝてあふ坂山のさねかつら くるさへつらきみしか夜の空

右

女房

122

むすひ^(む)をけ蓮の糸のあふ事も 此世の露のちきりのみかは

左歌は後撰に。名にしおはゝあふ坂山のさねかつら人にしられて来
るよしもかなと侍るをとれるにや。たゝし恋の歌をやかて恋にとり
て。しかも文字の^(む)をき所など。いたく本歌にかはらす侍るは念なく
や覚侍む。右は藕糸難行の事に興して。蓮取再会の縁を契れる計な
り。勝へきよしおのく申され侍しを。この歌遍身の病侍るよし申
出侍るにより。持とは付られけり。

二百番 (秋別恋)

左

123
いかにせん^(む)手をわかるへき折しもあれ 人に扇の風そ秋なる

女房

右

袖の露もおきわかれ行あけくれに 尾花かもとに思ひ消めや

右衛門督

〇 あけくれに―あけくれは(河集)
〇 つきにける―つきける(集)

〇 へきと―へきよし(河集)

左はいかにせん^(む)とをけるより。風情つきにけるにやと聞え侍れは。
尤右をもて勝とさためらるへきと申き。

二百十四番 (冬恨恋)

左

124
さ夜千鳥ひとりあかしの浦なりと 我計なるねをはなかしを

女房

右

風しほる^(む)霜の岡へのくすかつら くるしやかれて残るうらみは

定衡

〇 なり―なる(集)

左歌。浦なりといへる詞。聞にくゝやと申されしかとも。後鳥羽院御製に。たのめすは人をまつちの山なりとなと侍れは。かゝること葉つかひはことなる難は侍らしと覚侍り。しかれとも右のくすかつら。下句なと優に聞え侍れは。猶勝へきにやと申侍り。

二百三十番 (春述懷)

○きかん—きかは(河集)

○ほと—はとも(河集)

○けり—ける(集) ○うたゝねに
—うたゝねは(河集)

○白雨—ゆふたち(河集)

左

女房

125 うき身にも四十年の春は過にけり なれにし花よ哀ともみよ

右

従三位仲方卿

誰ために咲ともきかん山さくら うき身は花をよそにてやみむ

左歌はあやしの愚老か述懐の歌に侍りけり。あはれといへる人のなきはとのしられて。花をかこち侍るさへものはかなく聞え侍り。右歌もおなしうき身の花なるうへ。こゝろの色の浅深もわかたれかく侍るを。とりわき左の勝とさためられ侍ることかたはらいたく覚え侍れ。

二百四十七番 (夏懷旧)

左

女房

126 すきにけり親のいさめを思はずは 此短夜もうたゝねにせん

右

入空

白雨の雲のは遠くなる神の ^(お)をとにたに聞むかしなりせば

左。親のいさめのうたゝね。めつらしからぬふる事なるうへ。このみしか夜なとは。たとへは五条三品のうたに。この一ふしをおもひ ^(お)をくかなと。父子の心にことは ^(お)ををかれる。證例とも申へけれども。

〇侍る―とはへる(集)

〇世の中―よのこと(集)

おほよそ此一首の心。あまりいふくろなるもねかはしからざるに
や。右歌。をとにたに聞むかしなりせは侍る。いさゝかおほつかな
く侍り。そのゆへは上古の繩を結し世の中も。典籍はしまりてより
此かたは。をとにきかぬはかりの事はありかたく侍るにや。いか
ゝ。しからはしはらく持とすへくや。

二百六十五番 (秋神祇)

左

時繁

光をや神もそふらむ春日山 みねたちのほる秋のよの月

右

女房

〇てらす―てらせ(河集)

127 久方の空に光は猶てらす さてそくもらぬ月よみの杜

〇侍れは―はれと(河集)

右歌の月よみの森。さきに同類のさたの侍しやらむ。又さてそなと
いへる詞。古人も読侍る事は。子細に及はす侍れは。いたくこのみ
もちゆへきにあらざるよし。申さるゝかたゝも侍りて。左の勝に
付られ侍りぬ。

二百七十八番 (冬釈教)

左

女房

〇あまり―あまち(河)

128 今も猶草の莖やしきしのふ しもと(ゆ)いふ月の廿日あまりに

○左の歌―左歌(集) ○おもへる
―おもひつる(集)

(ハヤ)
左

近衛

春よりも西のかたへを待身には 御名をとなふる年の暮哉

左の歌の草むしろ。なにことそなと。をのくうたかひおもへる
にや。たとへは十一月廿四日は天台智者大師の忌日そかし。その日
にあたりて大僧正慈恵のよみ給へるうた。そのかみのいもゐる庭に
あまれりし草のむしろもけふやくらむと侍るは。続後撰に見をよ
ひ侍りしよし申出し侍りしかは。さる事ありとて勝の字をゆるされ
侍りし。

9 文安五年(一四四八) 六月十八日五十首外様御歌始

【底本】宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』ハ153・208V第二冊

旅春雨

兼良

129 旅枕むすひたえにし霜かれの 草葉もよほす春雨そふる

野旅

兼良

130 さなへとるたこの入野の露わけて ぬれぬたもとはもすそならねと

10 文安六年（一四四九）七月二十二日禁裏月次歌会

【底本】宮内庁書陵部蔵『類聚和歌』ハ154・1
 【校合本同】『先代御便覧』所収本

（先）

卯花盛

兼良

131 限あれは月のさかりとみるはかり 初うのはなの陰やそふらん

炉火

兼良

132 うつみ火のきゆれは霜の置かへて よはにさえたる片敷の袖

伝聞恋

133 世かたりに聞捨さりし言のはの 行ゑをたとる中そくるしき

○かたりーかくり（先）
 △注V132と続けて書写されてゐる。

11 宝徳元年（一四四九）十一月十八日禁裏月次歌会

【底本】大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』ハ41・24V

夏雑物

兼——

134 あつふすまさえし霜夜にいかなれは 一くをもき夏のころもて

12 宝徳元年十二月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

稀恋

兼良

135 今日こと(む)にきみをみあれのもろかつら かけすはまつもかれやはてな
ん(む)

互恨恋

兼良

136 色かはる真葛の露よいつ方か うらみの数はみたれそふらん(む)

花帯露

兼良

137 はなの色に秋のあはれもかよひきて さらに露けき春のゆふくれ

13 宝徳二年(一四五〇)正月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

照射

兼良

138 なつ山にたつやまつおの(む)ともしつま あふもまれなるよはのさをしか

田家

兼良

139 あきはつるしつか山田のかりやかた かりにもとはぬくれそさひしき

夢

兼良

140 たのみしを^みみたし枕の夢^{つこ}ならは いく夜もなかきねふりしてまし

14 宝徳二年二月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

夕花

兼良

141 はなさそふあらしや雲にまよふらむ ねりゆくとりの声にはふなり

志賀花園

兼良

142 あれはてゝとふ人まれになりけり 春もいく世のしかの花その

15 宝徳二年三月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』

春

兼良

143 松はまたあさはのゝへのあさ霞 たつみわこすけ雪もけなくに

冬

兼良

144 あはれなるをしまかいそのうきねかな 月かたふきて千鳥なく也

16 宝徳二年十二月十八日禁裏月次歌会

〔国本〕宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第二冊

雪月雁

兼良

145 くれし秋をしのふのころもかりなきて うちにみたるゝ雪のいろかな

17 宝徳三年（一四五二）正月十八日禁裏月次歌会

〔国本〕宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第五冊

春曙

兼良

146 かすむなり花うくひすはまたこら^して 春とはかりの明ほのゝ空

嵐

兼良

147 秋といへと人の心のあらしこそ 毛をふて物のなを^ほはけしけれ

別恋

兼良

148 暁の空うらめしきわかれより 木々のしつくもおちやそふらん^(む)

元服

兼良

149 ゆひたつるちひろの海のみるさまに いそひたひと^{字落}へはへつるかな

18 宝徳三年二月十八日禁裏月次歌会

〔原〕本宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第五冊

野鶯

兼良

150 のへかさに今やなくらん^(む)とはかりに 又^{また}里なれぬ春のうくひす

海霞

151 けさまては見えし小嶋も霞たつ 浪まやいつく春の夕なき

寄名所恋

兼良

152 玉もかるいちこのしまのしほさぬ^るに ぬれにし袖ととはゝこたへよ

寄閑述懷

兼良

153 世々の跡にこえん^(む)ことこそかけさらめ 名をたにとめよ閑のふち川

寄天祝

154 雨かせも日かすたかへす^(む)をとつれて おさまる時そ空にたゝしき^(む)

△注▽150と続けて書写されてゐる。

△注▽153と続けて書写されてゐる。

△注▽二字分よみ難し。

大日

兼良

155 池水のあはれいかなる□なれは 蓮のうへのもしとなりけむ

19 宝徳三年三月十八日禁裏月次歌会

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第五冊

滝上桜

兼良

156 さくら花おちてはあはとみよしのゝ 滝のかうちにゝほふ春風

晩月

兼良

157 あきの色はみへけるものをゆふつくよ さすや岡辺の松の梢は

来不会恋

兼良

158 とはれしは夢かうつゝか人こゝろ うしみつまではねすなりにけり

逐日増恋

159 いかにせむきのふにけふはまし水の あまるおもひもせきあへぬ身を

小鷹狩

兼良

160 はしたかのとやのゝ真萩露わけて はつかり衣花もするらし

△注▽158と続けて写されてゐる。

20 宝徳三年四月十八日禁裏月次歌会

【底本】宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第五冊

晩夏蟬声

兼良

161 本はれてまた人しらぬ秋風に (お)をのれしのはぬ蟬の声かな雪埋苔住 録

兼良

162 たらちねのをしへし跡もふりにけり 庭の苔ちをうつむ白雪

炉火似春

163 やゝちかき春のひかりをうつみ火の あたりの風もさゆるとはなし

契誓言恋

兼良

164 わするなよもかはらしと松浦なる 鏡の神にかけし一こと

夜渡余袖 涙

兼良

165 身のうさをおもふにあまるね覚して 涙せきあへぬよはの袖かな

21 宝徳三年五月十八日禁裏月次歌会

【底本】宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第五冊

〓注〓
 162と続けて書写されてゐる。

林早夏

兼良

166 くれし春のなさけわすれぬ夏木立 秋や紅葉をさらにたかまし

秋苑月

兼良

167 秋さむきそのふの月にとふ蝶の よはにおとろく夢もはかなし

杉霜

兼良

168 山かせの朝霜はらふかよひちは 冬そきにける杉たてるいは

秋恋

兼良

169 物おもへは秋の草はの露よりも こほれそまさる袖の涙は

22 宝徳三年六月十八日禁裏月次歌会

〔國本〕宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』等五冊

山早春

兼良

170 おく山に雪おれはてぬときは木は はるとゝもにやたちかへらん(五)

五月雨晴

兼良

171 けふいくか日かすふるやのさみたれに はれてもしはしのきの玉水

初秋風

兼良

172 しらさりし風のやとりを萩のはに うらみ初たる秋はきにけり

鶴弘霜

兼良

173 あしのはもかるゝ入江の夕霜よ をのれしほれぬ鶴の毛衣

23 百首歌合ハ宝徳三年八月十一日V出詠歌

蔵本宮内庁書陵部蔵日野本ハ日・4V

校合本群書類従所収本

五番 (雨中萩)

左

権大納言

○葉分ーははけ

きゝわひぬ葉分のかせは吹すてゝ むら雨さやくにわの萩はら

右

関白

174 風のをとの村雨そよく萩のはも まきれぬものを秋の思ひは

左右のむら雨さやくといひそよくと侍るともおかしく侍りこの萩
の風勝劣きゝわかれす侍れは持と申へくや

○侍りー×

○きゝわかれすーわかれす

十六番 (秋夕情)

左

式部卿宮

○かはらしーかたらし

かはらしなたか夕暮もうしと思ふ こゝろひとつの秋のあはれは

右

関白

175

いかにせんおもふものを思ふとて なかむれはまたあきの夕暮

左歌あしからすきこえ侍るを右思ふも物をおもふなとをかしく侍れ

は勝にこそ

二十一番 松月幽

左

沙弥祐雅

○葉分ーははけ ○ほしーつき

おく山のまつの葉分にもる月や よそなるほしのかすに見ゆらん

右

関白

○葉分ーははけ

176

すむ人はいてゝやよそにみやまへの 松の葉分のつきそすくなき

○葉分ーははけ

左右の松の葉分の月いつれもかすかに見え侍を右猶心あるさまなれ

は尤勝侍るへし

三十三番 (塩屋月)

左

右衛門督雅親

ふけにけりなたのしほやくすてゝ あし屋の軒に月を見るまで

右

関白

○あまのーあま

177

須磨のあまのしほくむ袖にやとる月 はてはけふりのくもるなりけり

○をるはたーx

左 なたのしはやきやきすて、月を思ふ心右しほくむ袖の月に煙をい
とひ侍るもとりく、に聞え侍り猶さやかなるにつきて左まさるとや
申へからん^(お)

四十二番 (暮秋虫)

左

太宰権帥実雅

秋さむみ夕しもまよふくさのはら かるれはかるゝむしのこゑかな

右

関白

178 行秋のたむけのにしきを^(お)るはたを 野もせにいそく虫のこゑかな

左 かるれはかるゝなとあしからす聞え侍るを右手向の錦を^(お)るはた^(お)
かしくきこゆ勝と申へし

五十六番 (忍涙恋)

左

前大僧正義

もらしてやあらぬ涙にまかへまし せく袖をこそあやしとも見め

右

関白

179 わか袖にきよみか波のせきす^(お)へて くるしや人めもらぬ日もなし

左右ともによろしく侍るをあらぬ涙と侍るやいかなるなみたにかと
覚つかなく聞え侍^(お)らん右のきよみか波立まされるかたも侍なん

六十一番 契待恋

左

雅康

ちきりをきし人のこゝろのいかなれは まつ夜むなしき色を見すらん^(巻)

〇 関白ーX

右

関白

いま^(巻)こんとゆふへのいろもさたまらず 人のこゝろのそらのうき雲

左歌の下句待空恋とや聞なされ侍へき右させる事は侍らねと左には

まさると申へくや

七十八番 (恨絶恋)

左

右大臣

露はさもたかゆかりとかむすふらん^(巻) たえてふみみぬ中のみちしは

右

関白

181 ゆらのとのさとのしるへもかひやなき かちをたえたるおきつ舟ひと

右露はさもと侍るいかにそや聞ゆ右かちをたへたるなとよろしきさ^(巻)

まに侍れは勝へきにこそ

八十四番 (旅宿夢)

左

権中納言資任

ふるさとをわすれぬ夢もおとろけと まつかねまくらかせそはけしき

右

関白

182 ふるさとの夢にもまたや見えつらむ たひねのやまの露のころもて

左右させる難も侍らねは持たるへき歟

百番 (名所鶴)

左

前大僧正満

松かねの苔もみとりのかめやまに つるの毛ころも千代やかさねん

右

関白

183 きみか代のなかきためしにちきらまし 玉のをやまのつるのよはひは

左みとりのかめ山に鶴の毛衣緑毛を思はせ侍歟おかしきこゆ右も

なかきためしに玉のを山をとりよせ侍りいづれもあしからす持にて

侍へし

24 宝徳三年冬(存疑)禁裏月次歌会

〔底本〕宮内庁書陵部蔵『公宴続歌』第三冊

野外雪

兼良

184 冬もなを日かすをつめはいはくらの をのゝあきつにふかきしら雪

25 宝徳四年（一四五二）正月十八日禁裏月次歌会

〔底〕本宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第四冊

帰雁

兼良

185 かへるかり都のはなを人とはゝ こしのしらねをさしてこたへよ

変恋

兼良

186 霜をかぬ人の心のあきもなを^{（ほ）} ことのはよりそ色かはりける

26 宝徳四年四月十八日禁裏月次歌会

〔底〕本宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』第四冊

旅春雨

兼良

187 わか為のころも春雨ふるさとに かへりこむ日をいもや待らん^{（む）}

嶋千鳥

兼良

188 嶋つたふをちかた人の友千とり つまよふこゑはさそなかなしき